

# 源氏物語研究享受資料一題

——「源氏物語佚文」と『繪本姪文庫』——

稲 賀 敬 二

## 一、源弘賢の「源氏物語佚文」

江戸時代の版本には、後に「何某先生著述目録」という類の広告があげてあることが多い。そんな中には必ず源氏物語の注釈らしい名前が含まれている。しかしそれが本当に刊行されたのか、広告だけ出して本屋の方が逃げてしまったのか、小數部數で私どもの目に入らぬのか、そのあたりがさっぱりわからないという例によくぶつかる。源氏物語研究・享受史の興行の広さである。

先日、内閣文庫で「内閣文庫未刊史料細目」という目録にある「私聽草」というのを拝見した。宮崎成身という幕臣がこまめに集めたもので、時には板本をそのまま綴じこんであつたりする。一七六冊という大部なものだが、その中の第一四四冊目に、源弘賢「源氏物語佚文」というのがあつた。一丁表・裏の短文で、次のようなことが書いてあつた。

若菜下巻に、まかびるさなのと書きさしたるはさもありなん、  
柏木巻に、はひのざりなどとまりしをばいかにぞやと、年比疑  
はしかりしを、為氏卿（わうじ）の本には此下に數十字あり、いとめづ  
らしとおもひつゝよみもて行しかば、それも猶末は紙のつきめ

はなれうせて、おもひといふ詞まであり、いとほいなくて至らぬくまなくたづねもとめ、からうじてその末をもとめ得たり、さてこそかゝる本もありけれとよろこばしさのあまりに、行成卿の字をあつめうつして世にひろめ侍りぬ

と由来を述べて、柏木巻末の本文を「志堂ま布佐末の」云々と丁寧に記し、最後に「文政四年正月源弘賢刻」と記している。

柏木巻末の本文が「はひのざりなど」で終っているのは青表紙本系統の諸本、弘賢が記しているのは河内本および別本系の東山文庫に見える本文である。加えて弘賢が最初に見た為氏筆本は、河内本の本文を備えながら「おもひ」以下の部分が「紙のつきめはなれうせて」いたというのだが、「源氏物語大成」所収の河内本諸本の中に、大島雅太郎氏蔵伝二条為氏筆本は、まさにこの弘賢が見た本そのものようである。「おもひ」まであつて、以下の「きこえ給て」云々は落丁と大成は注している。大成の凡例によると伝為氏本は本来大和綴であつたものを後に巻子本に仕立て直したものだといふ。弘賢が見た時は巻子本改装前の形であつたであらうか。弘賢が見た完本の河内本柏木巻はどんな本であつたらうか。弘賢のような学者の書き残してくれたメモは、短いものでも研究史資料としている

いろな事を教えてくれる例である。

## 二、「絵本姪文庫」の源氏享受資料

題目だけ見たのでは源氏物語の享受資料であるとは容易に気づかぬ種類のものがある。書肆の店頭で偶然手に入れた端本の「絵本姪文庫」。「国書総目録」によれば、五冊、月岡雪鼎(円下)画だとある。国会図書館に宝暦八年板、京都大学に宝暦十二年板がある。

「日本歴史図録」(大正九年十月、国民図書刊)に活字本があると、もうが、まだ見たことがない。板本といってもそう沢山伝存しているわけではないようである。架蔵のものは第一冊だけの端本だが、源氏物語享受史とのかかわりからいえば、この一冊だけで充分なのである。他は古今集などで源氏物語と直接関係はない。

この本、表紙見返しに、次のように記している。

敷しまのふみは名にしをふならの葉の宮に集給ひし万の言の葉に始り章の麗しきは伊勢源氏物かたりにしくはなしこれを絵に写しおふなの子にあたへてあし引の山高く上りわたつ海の深きことわりを得てん物と姪文庫と題し世に弘ることしかり

題名の由来はこれで明かであろう。

## 三、冒頭六条の翻刻、解説

第一丁表には「千載慕紫君貞烈」と大書する。これは「上」の扉に当るもの、「中」のはじめには同じように「月清明石中秋夜」などとある。

以下、第一丁裏と第二丁表の見開きに一場面を当て、第二丁裏全

面と第二丁表半分にかけて絵、残る半分の二丁表左半に絵解きの説明文を配し、絵の右上に和歌一首を記す。和歌とは、

曇りなき君が光のかくしこそ出る朝日ものどけかりけり(漢字にはすべて訓みがつけてあるが、繁雑になるので、以下すべて略した)

以下、絵に対する説明文を資料として紹介するために全文引用し、次に絵の図柄との対応について若干の解説を加える形式で、致場面を順次見て行くこととする。

1 (第一丁表・第二丁裏、説明左半) 光君のおとなび給ふにつけて、いと愛敬づきて御すがたいや高くましませしに、父みかどの御いつくしみかぎりなくて、春宮ともとおほしめせば、博士めして考へさせ給へば、松桜を占出したりぬ、勘文に余に上なき卦に侍れば、みてるをかくのならひにて、末に乱るゝ色やあらん、人臣に下届させ給ひて天が下のかためとならせたまはんこそ行末めでたくおはしまさんと申ぬれば、みかども、かしこくも考へ申せしと思しめして、源の姓を給ひて、御年十二にて元服ましまし、大藏卿冠奉られしより御装束あらため替させ給ひし、御ありさま、ことにすぐれていとじんじやうにひかりかゝやきて、やうぎじんたいたぐふべくもおはしまさざりけり、占のごとく行末いとやんごとなくさかへさせ給ひけり(濁点原文のまま。句読点は私につけた)

〔解説〕 この場面の絵は、右に童形の光源氏、左に御簾を背に公卿が対座し、その間に折鳥帽子姿の男が右脇に黒塗りの大箱を置き、その箱から取り出したとおぼしき冊子を一冊開いて、何やら弁

じている。おそらく正面の御簾の中に桐壺帝、これに正対して勅文を説明する博士、その左右に光源氏と侍臣を配した図柄である。

図柄、説明文の両者からわかるように、この場面は「源氏物語」の桐壺巻、帝が皇子の将来を決定するために、皇子を相する所である。源氏原典では、光源氏の親相は高麗の相人によってなされる。

その後で「帝かしこき御心に大和相をおはせて」という段取りになるのであって、図柄の説明によると「博士めして考へさせ給へば」とあるから、「姫文庫」は高麗の相人の方は省略し、大和相の場を図柄にえらんだことになる。そしてこの博士の大和相は、上なき位に昇ると「末に乱るゝ色やあらん、人臣に下居させ給ひて天が下のかためとならせたまはんこそ行末めでたくおはしません」という結論だったのだから、その内容は、源氏原文で高麗の相人が申したこととはば一致したことになる。

ここまでは、そういうふうは何とか説明がつくが、大和相は「占」であり、その「卦」は「松桜」というあたりは、「姫文庫」の完全な創作である。

大阪女子大学蔵「源氏物語絵詞」は室町時代の筆で、「源氏物語」の各巻々の絵にするに適した場面と、その図柄を説明した興味深い資料であり、既に複製がある（大阪女子大学国文学科紀要「女子大文学」第19号、昭和42・11月）。これにも「かうらい人の相人に源氏をみせ給ふ、右大弁つきて行、東寺の辺敷、弁も相人も源氏も何ども多く作かわし給ふ、ろく共天子よりも相人よりもたがひに奉る、源七つ八つ比か」とあって、高麗相人親相の場は図柄として定着していたようだし、絵入源氏物語の類もここを扱ったものが多い。姫

文庫は、子女にわかりやすい場面ということで、高麗相人避け、博士の大和相の方を図柄にえらんだものであろうか。この点は、なお次の絵の説明とあわせ見られたい。

2（第二丁裏、第三丁表、説明上欄）源氏北山へおはしませし折から例の御好こゝろなれば、そこら忍びありかせ給ひしに、紫の上のまだおさなくて尼君の御かたにおはせしが上臈しきに見とれ給ひて、めのとの小納言にむつびよりて、都に迎へて見奉らばやとの給へど、小納言も此事いかゞあらんと占て、松桐を得たりしかば嬉しくて、姫君を具し奉りて都の二条院へうつりぬ、おとなしくなり給ふにつけて御姿もいとみやびかに御心のほどもやさしかりければ、源氏限りなくめでさせ給ひぬ、源氏の時めかせ給ふにつけて、いともでたくさかへさせたまひけり

〔解説〕この場面の絵は、桜の咲いた山道の左端に光源氏、右端に惟光、良清らしい侍臣二人、その間に紫上と乳母少納言を配する。光源氏一行と紫上一行とが山道で行き違ふ瞬間、光源氏は左腕を伸して乳母の袖をおさえて、意中を語る図柄である。源氏原典からは遠い。大阪女子大本「源氏物語絵詞」が若紫巻で示している絵の場面指図は次のようである。

○北山に比三月末、卯月一日比也、柴がきあるべし、源氏、惟光斗御供にてのぞき給ふ、すだれすこしまきあげ花をたてまつる、きやうそくのうへにきやうをよむ四十あまりのうば君也、中の柱によりゐてとあり、女房たち二人子共あるべし、すゞめの子をにがしたるをしたふて、むらさきの上の衣東白き衣、山吹な

どのなれたるきて、かみはあふぎをひろげたるやうにとあり  
これは若紫巻の中で最も著名な場面、雀の子を逃がした時の紫上の  
様である。

○僧都の所へ源氏行給ふて、草木色々、やり水、月なき比、燈籠  
などに火とほし有へし、僧都は三昧堂にてしよ夜おこなる給ふ、  
源氏は其間にうば君とものかたりの所也、次にびやう風あるべ  
し、其影にむらさきのうへあるべし、源扇子あるべし

以下六場面については引用することを略す。

ともかく「姫文庫」の説明は、若紫巻の光源氏と紫上との出会い、  
紫上が二条院へ迎えられた事の二点でまとめ、簡略を旨とする。し  
かも簡略にしたはずの説明の中に、またもや「占」の語が出て来る。  
乳母の少納言は、紫上を都へ迎えたいという源氏の中出に對する判  
断を「占」に求め、「松桐を得」て、吉と判断し、二条院へ移った  
のだという。源氏原典で、源氏が急に紫上を車で二条院へ迎える時  
は、「少納言とどめ聞えむ方なければ、よべ縫ひし御衣どもひきさ  
げて、みづからもよろしき衣着かへて」車に乗るのであつて、とて  
も「占」などする暇はないのである。

なお、この絵の右端には次の歌がある。

行末はたとへ違くと植ぬればかひある春に花や咲らむ（以下、  
歌は引く事を略すことにする）

3（第三丁裏、第四丁表、説明左端）朝がほの君は式部卿の宮の  
姫君にて、御すがたならびなくおはしませしが、御心ばせやさしく  
情のみちにもうとからぬに、源氏こゝろをよせ給ひて、見し折の露

はずぐれぬ朝顔の花のさかりはすぎやしぬらんなど詠て遣しなど、  
折につけつゝ恋渡らせ給へど、朝顔の君末々の事もいかゞやあらん  
と占給ひて、松橘を得給ひぬれば、いよいよ御こゝろかたくましま  
して、おもしろき御かへしなどは折に付てありぬれど、一生つれな  
くもてなさせ給ひしによりて、世の人に見おとさるゝこともなく、  
みさほめでたくきこへさせ給ひぬ、五十四帖の内にて烈女にぞおは  
しましけり

〔解説〕 この場面の絵は、部屋の中央に二人の女性が相對して  
いる。一人は立ち姿、一人は膝まついて文箱を差し出している。源  
氏からの文であろう。これだけでは絵にならないものだから左の空  
間に猫を一匹すわらせている。猫は女三宮物語くらいでなければい  
らぬ道具立て、朝顔の姫君が猫を飼っていたとは、源氏原文にもち  
ろん所見はない。

説明文中の「見し折の」の歌は第二句「露はずぐれぬ」とする。  
引用の誤りである。朝顔の姫君を「みさほめでたく」、貞女であると  
する人物評は、今川範政の「源氏物語提要」をはじめ、中世、近世  
を通じて評価はさだまっているが、「姫文庫」にいう「烈女」とも  
なると、現代人の語感ではついて行けない。

特に注意されるのは、朝顔の姫君が源氏に對應するのは、ここで  
も「占」で決めた点である。「占給ひて松橘を得給ひぬれば」、  
源氏へ拒否姿勢を貫く決意をしたとある。

4（第四丁裏、第五丁表、説明上欄）源氏中川のほとりの忍び通  
らせ給ひしに、加茂祭の折柄、忍んでかたらひ給ひし女のかたゆか

しくおほし出られ、すぎがてにやすらひ給ひしに、おりしもほとゝぎす鳴てわたる、もよほし聞えがほなれば、占取出て見給ふに梅竹を得給ひたりしかば、今は尋てもよしなしと思せど、またおほしかへして、是みつてかくなんへおちかへりゑぞ恐れぬ時鳥ほのかたらひしやどの垣根はと申ければ、内にはわかやかなる声して打をほめきて「ほとゝぎす事とふ声はそれなれどあなおほつかな五月雨の空とばかり云出して、また音もせずなりければ、これみつも此女の外にこのうつりぬると思ひ、うへしかきねもとばかり云て出ぬ

〔解説〕 この場面の絵は、左の垣根の門の所に惟光らしい男が立ち、右に光源氏と隨身らしい帯剣した男とが、空を仰いでいる。空には鳴いて過ぎる時鳥が一羽描いてある。巻としては花散里巻の一場面。ここでも源氏は「占取出て見給ふに、梅松を得」て、「今は尋てもよしなし」と判断を下している。

5 (第五丁裏、第六丁表、説明上欄) 末つむはなの君は御ころろさしのいとやさしくおはしませしが、源氏に逢なれまいらせ給ひしかど、ほどなく君はすまへさすらへ給ひぬ。おやはらからもおはしませざりしかば、かゝりし後は誰とふ人もなく次第におとろへさせ給ひしかば、めのなども、かくておはしまさんよりまたこと人にも頼み給へかしなどすゝめまいらすに、いとゞ物うくて世にながろふべくもおはしませねば、占せ給ふに、此卦を得たりしかば、たださへ御ころろのかたきに、いみじくみさほを守り給ひて源氏を待給ふに、ほどなくめしかへされ給ひ、あれたる家居などつくるはせ御ころろの正しきにめで、むかしにもまさりててうあひさせせ給

ひけり

〔解説〕 この場面の絵は、中央に末摘花と思われる女性、その前に座るもう一人の女性は、説明と対応するとすれば乳母ということになるうか。傍に燈火がともっているから夜なのであるう。末摘花といえは、普賢菩薩の乗物(象)に似た鼻が容貌の特色をなすのであるが、ここでは絵にもごく自然な姫君の容貌が描かれ、説明にもこの件は一つもふれてはない。説明の前半は末摘花巻であるが、後半は源氏が須磨へ行った後、蓬生巻にかかわるものである。好意的に解すれば「姫文庫」の作者は末摘花巻の醜女の像より、蓬生巻のいじらしい彼女の方に重点を置いて書いたとも言えるが、やはり基本にあるのは、困苦に耐えて源氏の帰洛を待つ彼女、いや更に言えは教訓の題材にあう一面を強調することだったのであるう。もう一步ふみこんでいえば、彼女が自分の運命を「占」に賭けた場面を作り出すことが眼目だったのかもしれない。

ただ、この末摘花の場合は、前の三例とちがって、「占せ給ふに、此の卦を得たりしかば」とは書いているけれども、「占」の「此の卦」の内容が、先々のように明示してないのである。実は「卦」の内容を明示しない例はこの次の場面も同様なので、もう一つだけ、実例を眺めてみることにしよう。

6 (第六丁裏、第七丁表、説明上欄) 源氏臘月夜の御事にて、みかどの御けしきたがひぬれば、月やあらぬ花やあらぬと詠しかたにもおほしなされて、おそれおほしめしをはしけるに、あかしの国へさすらへ給へば、いとゞこゝろばそく、いつしか都の空を詠る事もあ

りなんやとおぼせば、わが身さへつれなくせんかた佐て、神のおしへを見んと此卦をうらなひ得たりしかば、かゝる御告のあればと末たのもしくおぼして、なをなを住吉の神くんに祈りしるしにや、嶋におはせしかどみとせの後、みかどの御こゝろ和らぎてめしかへされ給ひ、むかしにもまさりてめでたくさかへさせ給ひけり

〔解説〕 この場面の絵は、左右に松、彼方に波寄せ返る海面を配した中に、馬上の光源氏をかこんで、馬の口取り、童など、従者計四人が、海浜を行く様である。説明の文との照応でいえば源氏の須磨下向(説明の文に、須磨のこととはなく「あかしの国へさすらへ給へば」とのみあるのは、先の5で既に須磨下向のことにふれたからである。あるいは明石上へ通う図か。須磨まで馬で旅した光源氏というのいかかかと思うが、説明の文中に「月やあらぬ」の業平の歌を引いて文飾としている点から見ると、これはどうも業平の図柄にヒントをえたものであろう。業平の東下りの図を摸したものかと思われる。

ここでも都から退居した光源氏は、我が身の将来を「占」にまかすのだが、「此卦を」と書きながら、その「卦」の具体的内容を書いていない。前条と同様である。

「姫文庫」はこの須磨の巻のあたりで、物語の筋の上での一段落をつける。第七丁裏一面を使って「琴の音も及し物を四つの緒をひき伝へし須磨の浦風」と歌一首、続く第八丁表には「月清明石中秋夜」と大書する。この第八丁表の形式は、第一丁表と同様、次の部分の扉に当るもので、版外のどにも第七丁裏が「上ノ十」、第八丁裏が「中ノ一」とある。私の「姫文庫」本文、絵の紹介、翻刻は一

応ここまでにして、以上見て来た所をまとめ、その問題点にしばり、以後の部分を参考にしつつ、若干の補注を加えることにしよう。

#### 四、「占い」で行動する登場人物たち

「姫文庫」の源氏解説の特色は、以上の例文でわかるように、各場面が登場する人物について、必ず「占い」の記事が加えられている点である。その「占い」は「松桜」のように「占い」の内容が具体的に明示してあるものと、そうでないものとあった。今、その状況を、全体的に整理してみよう。

- 1 光源氏の将来「松桜」・〔絵・松松〕
- 2 紫上の将来「松桐」・〔絵・松梅〕
- 3 朝顔姫君の決断「松橘」・〔絵・松橘〕
- 4 源氏、中川の女を占う「梅松」・〔絵・梅松〕
- 5 末摘花の将来「ナシ」・〔絵・梅梅〕
- 6 源氏、須磨での占い「ナシ」・〔絵・梅橘〕
- 7 源氏、朧月夜の君との縁を占う「ナシ」・〔絵・橘松〕
- 8 源氏の扇合「ナシ」・〔絵・松梅〕
- 9 葵上の祭見物「ナシ」・〔絵・橘橘〕
- 10 明石上、姫君を二条院へ渡す「ナシ」・〔絵・橘菊〕
- 11 源氏、秋好中宮に対し自制「梅菊」・〔絵・梅菊〕
- 12 源氏、紫上を夕霧の垣間見しを知る「梅橘」・〔絵・梅橘〕
- 13 玉鬘、初瀬参詣を決意「楓松」・〔絵・楓松〕
- 14 薫、大君との仲を占う「楓梅」・〔絵・楓梅〕
- 15 匂宮、六の君と契る「楓橘」・〔絵・楓橘〕

16 宇治宮の姫君の葺

大君「竹梅」、中君「竹松」・「絵・竹松。但し絵を一葉追加しここに竹梅」

17 常陸守、左近少将を婿取る「竹橋」〔絵・竹橋〕

以上を通過してわかるように、5と10は「占い」の具体的な内容を明示せずに「占ひ給ひて此卦を得給ひぬ」という形で書かれている。しかし、「占い」の内容が明示されている例について見ると、その具体的な草木の組み合わせが、絵の方に書き入れられていることに気づく。今列挙した諸例の最後に「絵」としてあげたのがそれであって、1桐壺巻の例のように、絵の場面の中に書き入れられ、障壁画として「松」が書かれているかと錯覚されるものもあるが、大部分は、絵の一隅に（多くは枠でかこつて）かかげられている歌のまわりに書き入れられている。「占い」の説明文中の草木が、絵と合致しないもの（1と2）もあるが、3と4と11と17は完全は一致する。従つて説明文に草木名を明示しない5と10も、実は絵の方で補つてあることになる。

2と8「絵・松梅」が一致しているが、2は本文に「松桐」とあるのが正しいのであろう。6と12の「梅橋」の一致は、6が説明文に草木名を明示していないために起つた現象か、あるいは、6が歌を記した枠の左上に「梅」、左下に「橋」を配するのに対して、12が枠の右上に「梅」、左上に「橋」を配するということ、配置の仕方でも変るといふ事であろうか。

ともかく1と2に本文と絵の不一致があるけれども「姫文庫」は、「占い」について異常な関心を持って書かれていることは明確であ

る。とすれば、各場面の絵に加えられた歌も、場面に即した歌であるよりは、占いに付随する性格が強いのであろう。今でも、おみくじに、道歌めいたものが付されているのと同じ発想かと思われる。

### 五、教科書としては不合格の「絵本姫文庫」

「姫文庫」の著作意図が、本稿の冒頭に引用した表紙見返しに言ふ所と背反しないためには、「あし引の山高く上り」とは「占い」によつて高い身分となる運命を予見すること、「わたつ海の深きことわりを得」とは「占い」によつて天地自然の命数を察知できるという事に気づかせる——そういう意味で「姫文庫」は書かれたという理解をしなくてはならない。オカルトブームに火をつけ、売卜業者の商売を助ける宣伝のために、この本は作られたのかもしれない。

この作者は、だから先へ進むに従つて「源氏物語」の知識のあやしさを露呈する。先にあげた十七項目の場面からも既にお気づきの事と思うが、8源氏の扇合などという場面が作られる。話はこうである。

「桐壺のおんみかどの御時、内には扇合を好ませ給」うたので、光源氏もそのメンバーとなった。「戯に此勘文とりいで、此卦を占はせ給ひぬれば、御心もさわやかになりて、思しうかみぬるまゝに、細やかなる黒骨のいとじんじやうなる扇に、葉の賦のおかしきはし、書て出させ給へば、自余の、こゝろをつくせし扇も見おとりせられて、此君のざへを称敷したりけり」というのである。おそらく絵合巻からヒントをえての創作である。

11 源氏が秋好中宮に対して自制心を働かしたという場面の絵も面白い。秋好中宮の居室にかざつてある本箱には、れいれいしく「明江入楚」と書いてある。「源氏物語」の登場人物たちの世界に、既に「源氏物語」の注釈書が出廻っているというわけである。

16 宇治の姫君たちの碁というのもおかしな話である。「宇治の宮の姫君達、碁を打給ひて、三ばんに数壺つ勝給ん方に花をよせてんと戯れ聞え給ふ」というのだから、実は八宮の姫君たちの事ではなく、竹河巻の玉鬘の姫君たちの話である。

17 常陸守が左近少将を婿取る場面というのも面白い。「ひたちの守が中娘のいとわかく愛敬づきて、情の道にもうとからぬを伝へ聞て、わか上達部などけさうしあへる中に、左近の少将とて廿二三ばかりのほどにて、こゝろばせしめやかたに才ありといふ方は人にゆるされたる人の、みやぎといふ女を中立に頼てさま／＼いゝよりければ、ひたち占取いでゝ見るに、竹橋を得たりしかば、やがて少将を婿にとりて、千代を寿くさかづきに、相生の松に色そひて、なみはこすとも替らじと、むすぶ系にしぞめてたかりけり」という、誠におめでたいお話。ここでは浮舟のおかれた境遇などは影かたぢもない。なかだちの「みやぎといふ女」などはどこから思いついた事なのであろうか。

「姫文庫」冒頭の効能書きによれば、これも一種の子女教育の教科書の役割りを荷うものである。しかも以上述べて来たように、ここで紹介されている源氏物語の説明内容には相当なでたらめが含まれている。当世の文部省検定教科書並みに行けば、合格おぼつかない内容水準である。教科書だとうたうのは建前であつて、本音はど

こか別の所にあるのかもしれない。その本音、意図の所在は明確でない。国語科教育史の材料になるか否かも不明のまま、この資料を野地潤家教授の遺曆記念に捧げたい。

(本学文学部教授)